詩集を用いた都市復興と災害心理についての分析

Reconstruction of the City and Psychological Impacts Described in the Poems

秋 山 孝 正**・山 岡 和 弘***

By Takamasa Akiyama and Kazuhiro Yamaoka

The psychological impacts of the Great Hanshin Earthquake to the people should be considered because the physical destruction must influence the mentality of the people. In this study, the poems written in the tragical situation of the earthquake are analyzed to show the mentality of the people. The authors have lived in Kobe as well as in the surrounding area. The themes, the nouns and the adjectives in the poems are classified to express the mentalities in two different areas. The first collection of the poems is used to carry out the analysis. Furthermore, the seasonal mentality change is considered as interaction between the state of reconstruction and the mentality of the people with the second collection of the poems. The study aims to emphasize the importance of consideration on mental climate for the city .

Keywords : reconstruction of the city, mentality in disaster, Great Hanshin Earthquake, the regional identity, the poems

1. はじめに

阪神大震災が1995年１月17日に発生し、この大地震により大都市の機能が破壊された。これにより人々の生活に多大な被害を被った。都市における土木構造物は、公共的な意味を持つの創造物であり、これらの物質的な破壊は人々に精神的な意味での影響を生じる。また震災地域の神戸の「街」としての精神的な復興が極めて重要である。したがって都市防災の検討においては、物質面からの第三者的な計画論に陥ることを回避しなくてはならない。

現実的にも震災の被害を受けた人々の「心への配慮」が重要な課題となっている。これは医療的な問題であるが、一方では都市の災害復興過程にとって地域住民の精神的復興の重要性を示すものである。

このとき、物的面から見た都市の災害復興過程は、報道などから比較的容易に認知できる。しかしながら、精神面からみた災害復興を計画者が感じることは容易ではない。したがって、微力であっても災害時や災害復興中の人々の心理を分析することは、都市の精神的な復興を考える場合に重要である。

本研究では、文学作品（詩集）を用いて、人々の災害時とその後の心理を分析する。詩集は災害時や復興過程時の「こころ」が文学的に表現された一形態である。これより災害時とその後の都市イメージや都市アイデンティティの点から人々の災害心理の変化を知ることができる。そして、精神面からみた都市の復興過程について検討することができる。

2. 詩集による震災直後の心理分析

（1）詩集の概要

一般に人々の心理が表出される造形物として、文学作品・絵画・音楽・などの芸術作品が挙げられる。

*キーワーズ：都市復興、災害心理、阪神大震災、地域アイデンティティ、詩集

**正員、工博、岐阜大学工学部土木工学科
（〒502 岐阜市柳戸1－1, TEL058-293-2443, FAX.058-230-1528）
***正員、加藤コンサルタント

これは、震災時においても同様であり、実体験のない計画者が人々の深層心理を知るための一方法となると考えられる。なかでも詩は、短歌・俳句と同様に、一定の形式で文字表現され、比較的分析が容易であることから題材に用いた。

ここで資料とした詩集は「詩集・阪神大震災」（第１集）で、地震の発生年（1995年）に発行されている[1)]。この詩集には、震災直後に詠まれた詩が全155編掲載されている。詩の詠まれた地域からみると兵庫県南西部の震災地域の詩が大多数である。

しかしながら、そのなかでは、地震の被害の大きい中心部（長田区・兵庫区・中央区・灘区・東灘区・芦屋区）の詩は約半数である。

一方、震災地域に隣接するが中心部に比べて被害の比較的少ない地域（垂水区・明石市・西宮など）では同数程度の詩が詠まれている。以下の詩集の分析においては、前者を「震災地域」、後者を「周辺地域」とする。したがって、この「詩集」では震災地域の詩が84編、周辺地域の詩が71編である。

（２）詩の主題による分類

まずそれぞれの詩に表現される意味を「主題」として分類する。詩などの文学作品は本来多義的あり、また表現そのものから体感的に心を伝達するものであり、その意味で統計的分類は適当ではない。

ここでは便宜上の分類を行っているが、文学的に妥当な分類法を提示することが目的ではない。つまり詩集全体について、どのような視点をもつ主題であるかを分類した。ここでは、11種類の主題に大別してとその内容を具体的に検討した。

【A；愛する神戸（10編）】

破壊された街と思っていたが、人々の明るさが残って、街全体も活気がありうれしく安心している。

この分類で代表的な詩『想』では、「このまちがどんなふうに　どう傷ついたにか　その悲しみ」とあり、震災により崩壊した自分たちの街を心配している。また「ああ　神戸　こんなに愛しいとは思っていたなんて」という表現もある。

【B；自然の驚異（８編）】

地震による被害の大きさを見たり聞いたりして自然の驚異、地震の巨大さを感じさせられた。

この分類の代表的な詩『祈り』では「巨大な仁王のごとき自然のちから」という表現があり、地震の規模の巨大さが表現されている。また「懸命に復興をめざす人々の歩みのなんという遅々」と地震に対する人間の非力さを表現する部分もある。

【C；惨状（27編）】

地震の状況や被害を見たり、聞いたりして、その悲惨な状況を表現する。

この分類の代表的な詩『スケッチ１』では「高架が落ちた国道」・「隆起の激しい踏切」・「崩れ落ちた商店街」などの表現があり震災地域の混雑した状況が分かる。また同様な混乱した状況を記載した作品は多数みられる。

【D；無力感（20編）】

地震の被害を見たり聞いたりするだけで、何も出来ないことを痛感している。

この分類の代表的な詩『大厄だから』には「なつかしい物すべてが失われていった」・「現実と対するのが怖くて」という表現があり、震災の被害が過酷で直視できないことが示されている。また「何もする気になれない日が続く」と再生の気持ちが起こらないことが示されている。さらに、「なにもかも　魔法のように消えて卒業したいものだ」とあり、現実逃避の心境が表れている。

【E；生きる気持ち（22編）】

地震により被害を受けたが残っている自分たちは復興活動などを通して頑張っていこうとしている。

この分類の代表的な詩『水仙花』では、「押しつぶされた僕のいえ」・「おばあちゃんが焼かれていったんだ　おじちゃんは病院だ」・「パパは額を十四針ぬったし　隣のおじちゃんは足をくじいている」など多数の人が震災による日常的被害が表現されている。また「毛布や布団をかぶって　ぼくたち　道でねたんだよ」という震災地域での耐乏生活が知られる。さらに「ぼくたち　生きつづけているんだ　生きていくんだ」という表現から、被災地域の人々のこれから頑張ろうという気持ちが表れている。

【F；災害の中の平穏（25編）】

地震により受けた被害は多大であるが、その中で見つけ出したわずかではあるが平穏な生活。

この分類の代表的な詩『漂う街』では、「アパートに住む幼児は《ブランコみたいに揺れたよ》と」あり幼児の純粋な感性を示している。また「瓦礫の間にタンポポが、汚れた顔を出して笑っていた」とあり、わずかなこころの安らぎが表れている。

【G；知人への想い（7編）】

震災によって連絡の取れない友人や震災地域の友人のことを心配している。

この分類で代表的な詩『ヤマグチさん』では、「夜の患者が来ない」・「毎週　律儀に薬を取りに来た男たちが一人も来ない」といつもの患者が来なくて心配している。また、「本当はホカロンも一緒に送りたいのだけれども」という表現からヤマグチさんに対する思いやりが表れている。

【H；死を悼む（11編）】

震災で亡くなった人々に対する悲しみと無念さを表している。

この分類の代表的な詩『五年早く！』では「その日　入院中の私はテレビに釘付けだった」という心配しているる。また「ふと発見し　とび起きたー」とあり、友人の死を知り驚いた様子が表れている。

【I；苦痛（12編）】

震災によって受けたこころの傷や時が経ってもまだ傷が残っている辛さ。

この分類の代表的な詩『かんにんえ』には、「うち　まだゆれてる」・「それから　ずっとゆれてる　こわいねん」という表現があり、地震による影響で精神的に不安定な状態になっていることがわかる。また、「泣くしかでけへんうちのこと　かんにんえ」という表現より亡くなった人々に対する想いと苦痛が表れている。

【J；励まし（12編）】

地震の被害が大きいが、震災地域の人々や街はきっと復興すると信じて応援している気持ち。

この分類の代表的な詩『朝の1時に』では「ぼくは目頭が熱くなった」とあり、震災地の神戸新聞が配達され喜ぶ気持ちが表れている。また、「毎日案じ続けてきて新聞である」とあり、被災地の復興を案じている気持ちが表れている。

【K；家族への想い（5編）】

地震によって失った家族への悲しみと、こころに傷を負った家族に対する心配を表している。

この分類での代表的な詩『駅前の喫茶店』では「長女が血相かえて駅の改札口まで走ったが」とあり祖父の地震後の行動を心配している。また「やはり案ずるまでもなかった」「虚しさ押し隠しての熱弁に　耳を貸してやってほしいのだ」という思いやりの気持ちが表れている。

（3）詩の主題による分析

まず図－1に主題による詩の分類結果を示す。全体として、C；{惨状}に分類される詩が最も多く、地震の被害は多数の詩に表現されている。また、E；{生きる気持ち}やF；{災害の中の平穏}の詩も多数存在している。

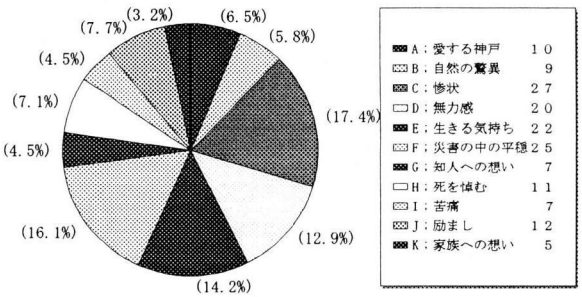

図-1　主題による詩の分類（全155編）

これより、被災した人々は安心して、これから頑張ろうとする気持ちを持っていることがわかる。さらにH；{苦痛}やD；{無力感}の詩も多く、人々のこころに地震の影響が表れている。

地域別にみると震災地域ではF；{災害の中の平穏}が最も多く、E；{生きてる気持ち}の詩も多い。これには被災者の頑張ろうという気持ちが表れている。またC；{惨状}に分類される詩が多く、D；{無力感}やH；{苦痛}の詩が多い。地震は物質的な被害だけではなく、人々のこころへの多く

に影響を与えたものと思われる。

一方周辺地域では、C；{惨状}の詩が最も多い。地震の惨状は、周辺地域においても、人々のこころに大きな影響を与えている。またD；{無力感}に分類される詩も多い。これは、地震による被害が多大であり、個人の力では無力なもどかしさが表れている。また、I；{励まし}の詩も多い。周辺地域の人々は、震災地域の人々に対する想いを持っている。

（4）詩に現れる名詞に着目した分析

つぎに詩の中に現れる名詞を抽出して集計した。このとき同一の詩に現れる名詞は重複して数えない。したがって、当該名詞の現れる詩数に対応している。

ここでは地域ごとに分析をすすめる。まず図-2に震災地域の詩に現れる名詞（頻度4以上）を頻度順に示している。「家」・「水」・「ガス」・「電話」・「屋根」・「電気」・「テレビ」など震災地域での日常的な生活に密着した名詞が多数出現している。たとえば「一晩電気のこなかったあの夜は」（詩1-62：あの日から）といった表現である。

また「道（路）」・「ビル」・「電車」など公共物を表す名詞も多数出現している。例えば「消えた道路」（詩1-60：兵庫南部大地震）である。このように、地震により公共建設物が破壊され、人々の生活に影響もを与えていることがわかる。

また「瓦礫」・「倒壊」・「亀裂」なども多い。例えば「五〇年前と同じように再び瓦礫の山となってしまった」（詩1-60：兵庫南部大地震）とある。また「戦争」・「焼け跡」など震災地域の状況を表すものも多い。例えば「戦争で食べ物が無くなったときも・・・」（詩1-60　兵庫南部大震災）とあり、震災地域の惨状が描かれている。また「避難所」・「病院」なども多数みられる。例えば「近くて遠い市民病院」（詩1-60　兵庫南部大震災）とある。これらは、直接的な被災状況と関係するものである。

つぎに同様に図－3に周辺地域の詩に現れる名詞（頻度4以上）を示している。ここでは「家」・「水」・「テレビ」・「電話」など生活に関連した名詞が多数となっている。例えば「水が動き　家が潰れ」（詩1-2　祈り）とある。また「道（路）」・「高速道路」など土木構造物を表す名詞が多い。例えば「一本足の高速道路が・・・」（詩1-14　背中が震える）とある。

また「街」・「町」・「瓦礫」・「倒壊」・「光景」・「都市」などの名詞も多い。例えば「欠け瓦を埋め込んだ土塀も倒壊していたので・・」（詩1-5　フラグメント・亀裂）とある。

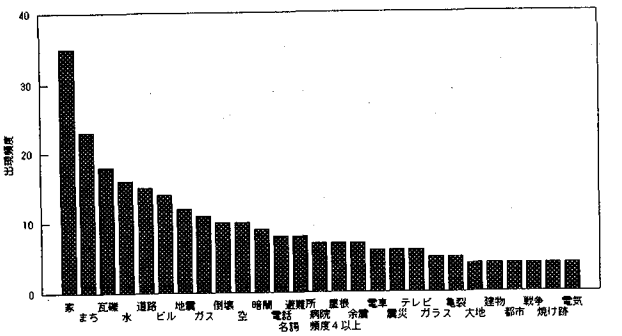

図-2　名詞の出現頻度（震災地域）

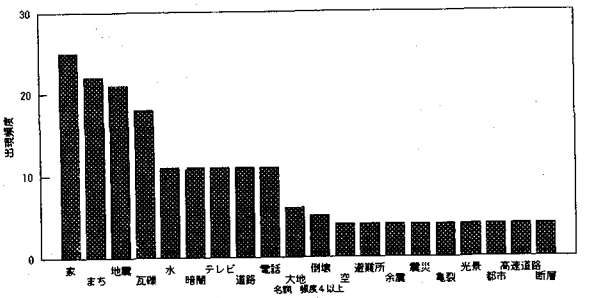

図-3　名詞の出現頻度（周辺地域）

両地域を比較すると、いずれの地域にも生活に密着した名詞が多いことが分かる。

しかしながら震災地域の詩のほうが割合は多く、細かいものにまで及んでいる。また震災地域の詩には「避難所」・「病院」・「屋根」など震災地域で必要性を痛感されるものが多い。また「焼け跡」・「戦争」が震災地域の詩に多数みられ特徴的である。さらに「病院」・「電車」・「ビル」など公共物を示す名詞も震災地域の詩に多い。

（5）詩に現れる形容詞に着目した分析

さらに詩に現れる形容詞による分析を行った。ここでは、詩の中に現れる形容詞が「ひとびとの感情表現を代表する」ものと考えたことによる。

具体的には名詞の集計方法と同様に、出現頻度

（誌数）を基本としている。この場合も地域的な相違を念頭において分析をすすめる。

まず震災地域の詩においては、「深い」・「冷たい」・「悲しい」が多く出現している。例えば「今日もぴんと立っている明石海峡大橋の橋桁が悲しい」（詩１-101　ごめんね）という表現があり、自分の周辺の破壊物に対する無念さが表れている。人々のこころの「震災の辛さ」は大きい。

また「優しい」・「美しい」・「柔らかい」・「あたたかい」・「明るい」・「きれい」・「親しい」など人間のぬくもりを感じさせる形容詞が多い。例えば「やわらかい湯だった」（詩１-75　待ち遠しい）という表現がありお湯に入る喜びが表れている。

さらに「激しい」という形容詞が多い。例えば「気がついた時には激しい揺れのなかで蒲団を被って縮んでいた」（詩１－108　また　ひとつ）とある。これは、震災の惨状を表している。

さらに、「懐かしい」、「古い」などが多い。例えば「一月三十日に取り壊す予定だった古い家」（詩１－92　阪神大震災）という表現があり、破壊前の家に対する懐旧の念が表れている。

また周辺地域においては、「悲しい」・「冷たい」・「空しい」といった震災の状況の辛さを表した形容詞が多く出現していることが分かる。例えば「夜には　冷たい冷たい冷たいと」（詩１－５　フラグメント・亀裂）というように出現している。

また「激しい」・「厳しい」など震災の惨状を示す形容詞が多くみられる。たとえば「激しい揺れは十数秒」（詩１－３　稲妻の走った土地で）は地震の揺動の大きさを示している。

さらに「新しい」という形容詞は再生を示すものと考えられる。例えば「新しい土地と　新しい人類は生まれるか」（詩１-144　至聖先天老祖）とあり、自然の大きさと今後の希望が表現されている。

いずれの地域においても震災の惨状や多大な被害を表現している形容詞が多い。特に震災地域では、「深い」という形容詞が多数使われており、被災した人々の「こころ」の傷の大きさが表現されている。

また震災地域では、「古い」・「美しい」・「懐かしい」などの懐旧的なものがあるのに対して、周辺地域では、「新しい」が多い。さらに「穏やか」は震災地域の詩にはないが周辺地域の詩には現れている。このようなことから、周辺地域においては、震災地域に比べると地震によるこころへの影響が少ないことが分かる。

３．詩集による時間経過と災害心理の分析

（１）詩集の概要

つぎに災害心理の時間変化について検討する。ここで検討のための資料として「詩集・阪神淡路大震災　第２集」[2)]を用いる。この詩集は、地震の発生した翌年にあたる1996年に発行されたものであり、前章で用いた詩集の続編に相当する。

この詩集は時間経過に即して編集が行われている。したがって、震災直後「そのとき」から地震の発生年（1995年）の「秋」までの４種類の時季ごとに、誌が分類され、収録されている。

この詩集に収録されている詩数は全133編であり、各時季ごとには「そのとき」：29編、「春」：36編、「夏」：32編、「秋」：36編となっている。

（２）　詩の地域分布による考察

ここでは、まず詩の詠まれた時季と地域の関係を分析する。まず「そのとき」（震災直後）に詠まれた詩の地域分布では、地震被害の多大な中心部（芦屋市・東灘区・灘区・中央区・兵庫区・灘区）の詩数が少ない。一方、周辺地域（宝塚市・西宮市・須磨区・垂水区）での詩数は多い。

また「春」に詠まれた詩も同様で、中心部の詩数は少なく、周辺地域の詩数が多い。さらに、この時季には震災地域西部（西宮市・宝塚市・芦屋市）の詩は収録されていない。

つぎに「夏」の詩では中心部の周辺地域の詩数に大きな相違はない。これより、震災地域の人々のこころに若干余裕が出来てきたこともと推測される。

さらに「秋」の詩では、中心部と周辺地域で詩数はほぼ同数である。時間の経過から地域の人々のこころにも、余裕が出てきたことが分かる。

（３）詩の主題による時間経過の分析

ここでは、地域による考察は行わず（区別をせず）時期ごとに詩の主題の分析を行った。まず「そのとき」（震災直後）の詩では、E；｛生きてる実感｝

に分類される詩が多い。被災者々が周りの人の死や被害を体験して、自らの無事を再認識している。

またB；{自然の驚異}やC；{惨状}の詩も多い。地震の規模や被害によるこころへの影響は大きい。一方、この時季には、F；{再生への努力}に分類される詩は少ないる。震災直後には、人々のこころに立ち直る気力が発生しにくい様子が分かる。

つぎに「春」の詩では、I；{苦痛}やD；{無力感}に分類される詩が多い。つまり、人々のこころに震災による心の傷がまだ多数残っていることがわかる。またE；{生きる気持ち}の詩が多くみられる。これは、震災による危険が過ぎ、自分達が生存していることに対して、感謝する気持ちが人々のこころに湧いていることを示すものである。

また、F；{再生への努力}の詩も多く、被災者のこころに立ち直ろうとする気持ちが起きてきている。一方、C；{惨状}に分類される詩は少ない。つまり、地震から時間が経ち地震による破壊物などがある程度処理されたことが分かる。また、B；{自然の驚異}の詩はみられない。これは、地震対する恐怖感が減少していることを示している。

つぎに「夏」の時季においては、E；{生きる気持ち}やF；{再生への努力}に分類される詩が多い。これより、震災から半年近くの月日が経ち、人々が、比較的安心している気持ちと、これから立ち直ろうとする気持ちが感じられる。

また一方で、I；{苦痛}やD；{無力感}の詩も多数みられる。これより依然として、震災によるさまざまなこころの傷が多数残っていることがわかる。

さらに、G；{知人への想い}、H；{死を悼む}やJ；{励まし}の詩は少ない。この時季には、他の人々のことを心配する余裕があまりないようである。またB；{自然の驚異}の詩も少ない。つまり、地震による恐怖は減少しているがわかる。またC；{惨状}の対応する詩もなく、この時季には、街の風景も落ちついてきた様子が感じられる。

さらに「秋」の時季においては、E；{生きる気持ち}に分類される詩が多い。このことより、震災からかなりの期間が経って、安心して生きる気持ちが感じられる。また、F；{再生への努力}に分類される詩が多い。このことより、人々の立ち直っていこうとする気持ちが分かる。

さらにD；{無力感}とI；{苦痛}に分類される詩は多く、震災によるこころの傷がまだ多く残っていることが分かる。一方、B；{自然の驚異}の詩は全くない。地震の恐怖が少なくなっている。また、C；{惨状}の詩も全くない。都市景観には悲惨さが感じられなくなったのであろう。

ここで、各時季を比べと、地震によって街は破壊されたが、徐々に復興していくにつれて、街を愛して行く気持ちが,A；{愛する神戸}に分類される詩の数の変化により分かる。

またC；{惨状}に分類される詩の数は減少した。これより、街の姿（景観）の復興が感じられる。また、B；{自然の大きさ、自然に対する恐怖}に分類される詩の数も減少した。このことより、地震から時間が経過するごとに、人々のこころのなかから「地震に対する恐れ」が減少しているのが分かる。

さらにD；{無力感}に分類される詩の数は時期ごとに増加している。このことより、街や公共施設は復興しているが、人々の周辺や生活環境は必ずしも改善されていないようである。

またF；{再生への努力}の詩の数の変化より、地震直後は感じられなかったが、春になり立ち直ろうとする気持ちが人々のこころに起きて来たのが分かる。さらに、H；{死を悼む}の詩数の変化より、震災直後の多数の死者への悼みから、時期が経つごとに変化、死者を悲しむことから、人々のこころも再建の向かっていることが感じられる。しかし、I；{苦痛}に分類される詩数の変化は少なく、時期が経っても人々に、震災による根源的な心の傷が残っていることが分かる。

（4）詩に現れる名詞に着目した分析

ここでは、すべての詩の中で特に現れる名詞を抽出した。「そのとき」（震災直後）の詩には、「水」・「家」・「布団」など震災地の生活に密着した名詞が多数現れる。これは生活必要品の不足に対応すると思われる。また「街」・「町」・「地」・「コンクリート」・「瓦礫」・「木」など地震の被害に関連する名詞も多数出現している。

つぎに「春」の詩では、「花」・「風」・「雨」・「空」・「春」など自然や季節を感じさせる名詞が多数出現している。震災から時間を経て季

節を感じる余裕が人々のこころに現れている。また「音」・「声」・「耳」・「目」・「命」など生命を感じさせる名詞も多数出現している。人々が生命の大切さを感じているのが分かる。

さらに「友」・「父」・「女性」なども多数出現している。このことから、自分の生活も震災時に比べ落ち着き他の人のことを心配する余裕が少しずつでてきたのが分かる。

また「街」・「町」・「瓦礫」・「家」など震災時に崩壊したと想われるものが多数みられる。これは徐々に、生活空間のなかにも復興が始まった状況に対応するものと思われる。

つぎに「夏」の詩には、「風」・「花」・「山」・「光」・「砂」・「空」・「月」・「陽」・「海」・「朝」・「草」・「雨」などの自然・季節に関する名詞が多い。また「街」・「町」・「道」・「家」・「ビル」など構造物を表す名詞も多い。この時季に各種構造物が再建され復興の進展が感じられる。さらに「子供」・「声」・「若者」など生命を感じる名詞も多い。これは、街に活気が戻りつつあることの表われであろう。

さらに「秋」の詩には、「街」・「町」・「家」・「更地」・「瓦礫」など街の復興を示す名詞が多数みられる。また「声」・「人」・「こころ」・「音」・「命」・「耳」など人間の生命を感じさせる名詞も多い。このことから、街に徐々に活気が戻りつつあるのが感じられる。さらに「空」・「秋」・「風」・「陽」・「夜」・「朝」・「花」・「土」など自然や季節と関連する名詞も多い。この時季には、人々の「こころ」に季節を感じる余裕ができたようである。また「震災地」・「震災」・「あの日」・「あの時」・「報道」・「記憶」・「場所」など過ぎた震災時を指す名詞も多い。

これらの傾向をみると、ある程度の時間を経たこの時季（秋）になると、地震を過去のこととして、新しい街づくりを目指す前向きな気持ちが生まれてきていることを知ることができる。

（5）詩に現れる形容詞に着目した分析

つぎに詩に現れる形容詞から、時季の変化を考える。まず「そのとき」（震災直後）の詩は、「激しい」・「恐ろしい」・「どでかい」など地震の大きさや程度を表す形容詞が多くみられる。また同様に「長い」・「暗い」など震災の心への影響程度を表す形容詞が多く出現している。

つぎに「春」の詩に表れる形容詞（図－4参照）をみると、「新しい」という復興を示す形容詞があり、一方で「悲しい」、という形容詞が多く出現している。このことより、震災のことをまだ考えていることが分かる。さらには「遠い」・「近い」など、心の中で震災は過ぎたものであり、思い出すものであることを表す形容詞がみられる。

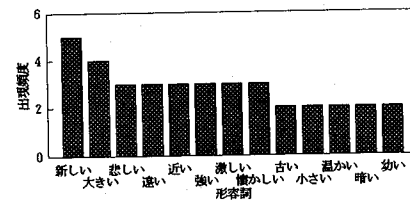

図-4　形容詞の出現頻度（春）

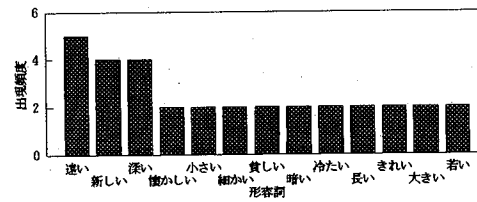

図-5　形容詞の出現頻度（秋）

また「懐かしい」・「古い」など震災前の街や人々のことを表した形容詞が多数出現しており、人々が震災前の街や人々のことを思い出していることが分かる。さらに「強い」・「激しい」、といった震災の状況を表した形容詞が多く出現している。このことから、人々のこころにまだ震災のことが残っていることが分かる。

つぎに「夏」の詩には「新しい」・「美しい」・「明るい」・「若い」、形容詞が多く出現している。このことから、復興が進んでいることが分かる。

また、「遠い」・「懐かしい」といった形容詞が多く出現している。このことから、震災前の街や人々のことを考えていることが分かる。

また「秋」の詩（図-4参照）には、「遠い」・「懐かしい」などがあり、震災前の街や人々のこと

を考えていることが分かる。

また「新しい」・「若い」・「きれい」が多く出現している。このことから、復興が進んでいることが分かる。さらに、暗い、といった震災による心の影響がまだ残っていることを表している形容詞が多く出現していることが分かる。

ここで各時季を時系列的にみると、震災の様子を表す「激しい」という形容詞が時期が経つごとに減少している。つまり時期が経つごとに人々の心の中から地震の恐怖が消えているのが分かる。また「遠い」という形容詞は時期が経つごとに増加している。このことから、地震が人々にとって過去のことになってきている局面も存在することが分かる。

また形容詞「新しい」は地震直後にはないがその後多数現れる。これは復興の進展を示している。また「古い」・「懐かしい」なども「春」以降の詩に多い。つまり震災から時期が経ち震災前の街や人々のことを考えていることが分かる。さらに「若い」・「幼い」・「美しい」・「あたたかい」、という形容詞も「春」以降の詩に多数みられる。これより、街のあちこちで復興が始まっていることや人々の復興に向かう気持ちが感じられる。

4. おわりに

阪神大震災によって、多数の土木構造物も崩壊し都市生活に多大な影響を与えた。しかしながら、神戸を中心とした被災地域の都市復興は物質的にも精神的にも進んでいる。これは、いまいちど現在の街を歩き、街のひとびとの生活を体験することで、容易に感じられることである。

土木技術の面から、こうした都市災害を検討する場合には、機能的・効率的な都市防災を目指そうとする立場から議論を行うことが多い。これは、専門的土木技術者として意義深いことのように思えるものである。しかしながら、都市は「ひとびと」が生活する空間であり、対象とするものが技術論的な問題であっても、そこに暮らす「ひとびと」のための検討がなされねばならない。

本研究では、阪神大震災の復興過程において刊行された「詩集」を読むことで、災害時および復興時における人々のこころについて考えた。災害復興は、ある意味では土木構造物の復興とも関連している。

また、本研究から知られるように、復興の状況の変化に対応して、生活の中にあってこころが変化し、さらにそれらの内容は時節とも関連して、ひとびとの街全体の「こころ」が形成されるものである。

もちろん本質的な意味から見れば、たとえばこのような「詩集」を熟読し、ひとびとの精神復興ための都市計画を計画者自身が考えることに勝る方法はありえない。したがって、形而上学的な詩集の分析は特に工学的な知見を即座に与えるものではなく、また正当なこころの分析とはいいがたい。

しかしながら、上述したようにいかに科学的分析であろうとも、現実に発生した災害を題材にする場合には、研究者として「こころ」を忘れるべきでないという反省からひとつの提案を試みたものである。

ひとびとのこころは、災害時の「こころのケア」として医療的な側面から検討されている[3)-5)]。しかしながら、各個人の集合体として形成される街としての精神風土を考えるとき、復興時の街全体の人々の「こころ」を知ることは、今後の防災計画においても重要なのではないだろうか。またこの拙著を、研究のための調査方法のあり方や研究者の果たすべき役割を再認識するための提言としたい。

特に本研究で用いた「詩集」は、阪神大震災の発生からちょうど2カ年を経て、第3集が刊行されている[6)]。さらに同様な分析を進めることによって、検討を本稿で示したひとびとの精神的復興が、さらに「復興への譜」として形成されていることを知ることができるものと思われる。

参考文献

1）アートエイド・神戸編：詩集・阪神淡路大震災，海文堂書店，1995.
2）アートエイド編集：詩集・阪神淡路大震災　第2集，詩画工房，1996.
3）安克昌：こころの傷を癒すということ，作品社，1996.
4）岡堂哲雄：［現代のエスプリ］別冊　被災者の心のケア，至文堂，1996.
5）藤森和美・藤森立男：心のケアと災害心理学，芸文社，1995.
6）アートエイド編集：詩集・阪神淡路大震災　第3集　復興への譜，詩画工房，1997.